

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 17 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23610009

研究課題名(和文) 無縁社会における宗教の可能性に関する調査研究

研究課題名(英文) Research on the potentialities of religion in muen-shakai (bondless society)

研究代表者

宮本 要太郎 (MIYAMOTO, Youtaro)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：10312779

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、平安な生活から疎外された人々に寄り添い、連帯し、共生しようとして続けられている宗教者たちによる諸活動の実態を調査するとともに、それら宗教者のライフストーリーにおける信仰と社会活動の有機的連関を把握することを目指して、2011年度から2013年度にかけて、釜ヶ崎を中心に聞き取り調査を実施し、他方、国外では韓国や台湾において研究者との国際交流を実施し、国内では「支縁のまちネットワーク」の活動と連携して宗教者との意見交換などを活発に行なった。

研究成果の概要(英文)：In this research, intending to, firstly, investigate the religious activities to get close and to live together with those who are alienated from lives in peace, and, secondly, to understand the relationship between those religious activities and the life-stories of the people engaging those activities, we did hearing survey, especially in Kamagasaki area (Osaka) on the one hand, and worked for academic exchange with researchers in South Korea and Taiwan as well as members of the activities through shien-no-machi network, on the other.

研究分野：時限

科研費の分科・細目：共生・排除

キーワード：無縁社会 宗教の社会貢献 ライフストーリー 支縁のまちネットワーク

1. 研究開始当初の背景

(1) 現代日本社会における「無縁社会」化の問題

これまでの長い歴史を通じて日本社会において情緒的・精神的な絆を育ててきた地縁・血縁関係が、急速な都市化や社会の流動性の高まりとともに希薄化し始めて久しいが、さらに昨今の経済情勢の悪化に伴う雇用形態の変化は、もう一つの日本的な絆であった「社縁」までも解体に迫りやろうとしている。さらに、近代合理主義と競争的資本主義によって舵取りされる社会では「強い個人」が前提とされ、その結果、弱者は「負け組」として経済的のみならず社会的にも「排除」されてしまいがちである。このように、人々のつながりの実感によって支えられてきた共同体がいろいろなレベルで崩壊の危機に瀕している。「無縁社会」という言葉に象徴されるかかる危機的状況に対し、各方面において喫緊の対策が求められている今、人と人をつなぐソーシャル・キャピタルとしての宗教の可能性に目を向けることは、宗教が地縁・血縁を構成・維持していくうえで従来中心的な役割を果たしてきたことを考えれば、けっして的外れなことではないと考える。

(2) ソーシャル・キャピタルとしての宗教

「強い自立した個人」を前提とする社会が抱えるさまざまな問題に対して既存の行政主導システムが十分に対応しきれないのは日本だけの状況ではない。そのようななか、制度的・法的な整備と並んで利他的な市民社会を構築することの必要性に対する認識が世界中で高まっている。そこでは、「自己責任」の裏返しでもある「自分本位」の風潮に対する真摯な問い直しが始まっており、その流れの一つとして、研究分担者の一人でもある稲場圭信の共編著 *The Practice of Altruism* など、宗教と利他性に関する研究も盛んになされてきている。そこには、宗教のソーシャル・キャピタルとしての可能性を最大限に活用し、共感や「思いやり」をもとにした市民社会を構築しようとする明確な志向性を読み取ることができる。また、研究分担者の一人、金子昭による『驚異の仏教ボランティア-台湾の社会参画仏教「慈濟会」』(2005)のように、社会参加仏教という概念で、宗教の社会福祉活動を研究する動向がある。世界的に見ても、宗教者、宗教団体、宗教的価値観・倫理観、宗教文化は、社会福祉の大きな役割を担っている。他方、日本国内に目を向ければ、国内でも宗教団体が行っている社会活動が多数存在するにもかかわらず、戦後の政教分離政策や公教育における宗教教育の排除なども影響して、そうした活動への社会的認知度や期待は高くない。しかし、研究代表者、研究分担者、研究連携者、研究協力者が関わっている『貧魂社会ニッポンへ』(2008)に描かれたように、宗教者と地域社会が強い信頼関係によって結ばれるこ

とではじめて宗教がソーシャル・キャピタルとして機能しうるものであり、その観点からすれば、宗教者や宗教団体による社会活動はもっと評価されるべきであろう。

かかる問題意識のもと、本研究の申請グループは、「無縁社会」日本における宗教の「ソーシャル・キャピタル」としての可能性を明らかにすることを試みるにいたった。

2. 研究の目的

(1) 全体的な目的

こんにちの日本社会は、一方で社会のセーフティネットから滑り落ちた人々を一般社会の生活空間から「排除」し、他方でさまざまな「弱者」の「共生」をますます困難なものとする状況を露呈している。さらに、雇用形態をはじめとした社会構造の変化は社会をますます移動性の高いものとし、人と人とのつながりを希薄化させている。本研究の主たる目的は、このような社会のあり方を「無縁社会」ととらえ、そこにおいて宗教(宗教者、宗教団体、宗教的価値観・倫理観、宗教文化)が果たしうる役割の可能性を実証的かつ総合的に探求しようとするものである。

(2) 3つの具体的な目標

今日の日本社会において宗教者や宗教団体などによって実際に行われている社会活動の実態を把握し、その背後に働いている動機や理念を明らかにすること。具体的には、研究協力者の白波瀬達也や渡辺順一がこれまで積極的にかかわってきた「釜ヶ崎」をメインフィールドとして、そこに見られる多様な宗教活動を浮き彫りにする。

同時に、これらの活動に参画している人々が抱えているジレンマを明確にしつつ、それらをどのように克服してきたかを跡付けること。そのために、長年このような活動にかかわってきた人々から聞き取り調査を行ってライフヒストリーを描き出すことを目指す。

社会活動を行っている宗教者たちを個別に取り上げるだけでなく、現場の宗教者たちとの間の、さらに宗教者以外の団体や地域住民などの間の、信頼関係に基づくネットワーク構築の可能性を探ること。このネットワークが機能して初めてソーシャル・キャピタルとしての宗教は「共生」社会の実現に貢献することとなる。その意味で、ネットワーク構築を促す本研究は、応用社会学的な地平をも視野に入れている。

(3) 釜ヶ崎について

いわゆるドヤ街には社会の貧困が集約されているといわれるが、そのドヤ街のなかでも西日本最大規模の釜ヶ崎は、こんにちの日本社会が抱える「貧困」を如実に物語っている。この街には、職だけでなく、住居も健康も、そして家族との絆も失った人々が、世間の冷たい風に吹き寄せられるようにして集

まってくる。ここはまた、キリスト教をはじめいろいろな宗教的バックボーンを有する人々がそれぞれの思いを胸に抱いて貧困者の支援に取り組んでいる場所でもある。キリスト教関係者の活動については、たとえば白波瀬達也の研究などがあるが、それ以外の宗教については、現状についても過去の歴史についてもほとんど研究されていない。釜ヶ崎を一つのフィールドとして、この地域と宗教との関係を通時的・共時的に明らかにしていくことは、地域社会における宗教の社会貢献の可能性を探る上で、重要なケース・スタディとなるはずである。

釜ヶ崎をはじめ、野宿者（ホームレス）が多く集まる地域では、主に社会福祉のニーズやその実効性などを明らかにするため、該当者たちに対する聞き取り調査が繰り返し実施されてきた。その延長線で、支援者たちも調査の対象になることがある。本研究は、支援される側よりもむしろ支援に従事する側からの聞き取り調査を重視する。それは、宗教的な動機によって炊き出しや夜回りなどの野宿者支援活動に携わっている人々の世界観・人間観・社会観などを探るとともに、それらの活動によって支援者たちの意識がどのように変容したかを明らかにし、信仰と社会活動の間の葛藤、変わらぬ現状に対する焦燥感、信仰の変容などを抽出・分析することが、社会貢献における宗教（者）の可能性を論じるためにも不可欠だと考えるからである。

近年各地で、精神的なつながり（スピリチュアル・ネットワーキング）をもとに「共生社会」を活性化しようとする試みが、宗教者、宗教団体、あるいは宗教と関連のある人々の手で新たに生み出されてきている。このような実践をできるだけ網羅的に把握することは、「無縁社会における宗教の可能性」を問う本研究にとって必要不可欠であると考えられる。稲場圭信が編者の一人となっている『社会貢献する宗教』は、その点で先駆的な試みであったが、単に個別の宗教団体だけを調査するのではなく、合わせて、宗教的バックボーンを有する個人や団体についてもその活動の実態を調査することが求められよう。なぜなら、先駆的な活動は宗教教団による組織的な運動というよりも、むしろ問題意識を抱いた個人によって開拓される傾向が強いからである。したがって聞き取り調査によってそのような個人のライフヒストリーを描き出すことができれば、ソーシャル・キャピタルとしての宗教にとって大いに効果的であろう。

さらに、それぞれの立場から取り組まれている社会活動／社会貢献に関して、個別に調査するだけでなく、それらの活動のネットワーク構築を積極的に推進することで、閉鎖化・蝸壺化しがちな活動の活性化をはかるとともに、地域社会に対してより開かれた活動の可能性を提言することを本研究は視野

に入れている。

3. 研究の方法

(1) 聞き取り調査

釜ヶ崎には、本田哲郎（フランシスコ会司祭、カトリック）、入佐明美（ボランティア・ケースワーカー、プロテスタント）、川浪剛（僧侶、真宗大谷派）など、それぞれ異なる宗教的背景を持ちながら、一般市民の生活空間から排除された人々に寄り添い、連帯し、共生しようと地道に活動を続ける宗教者たちがいる。このような活動に従事している人々からの聞き取りにもとづく個別のライフヒストリーは、これらの先駆的な活動が諸個人のいかなる問題意識から生み出され、また活動の展開の中で信仰のいかなる変容を惹起したかを分析することに役立つ。

(2) 実践者との意見交換

「支縁のまちネットワーク」の研究交流集会などの活動を通じて、宗教者による多様な社会的実践をめぐって当事者たちと意見交換を行い、宗教間の境界、宗教とそれ以外の活動の境界を越えたネットワークの構築に向けた協働の可能性を探る。

(3) 国外の研究者との連携

韓国や台湾において研究会を開催して研究発表をするとともに、現地の研究者との学術交流を進め、合わせて諸外国での実態を学ぶ。

4. 研究成果

(1) 2011年度は、研究開始直前に発生した東日本大震災により、研究計画を若干変更して、被災地において展開されている宗教の支援活動の実態調査を優先した。具体的には、福島県いわき市（金子、渡辺）および宮城県石巻市（宮本）において実情を調査した。一方、当初の予定通り、釜ヶ崎において継続されている宗教者の、とりわけホームレスの人々を対象とした支援活動の実態を明らかにすべく、救世軍西成小隊および大阪瑞光教会において聞き取り調査を実施した。また、2012年1月には韓国・圓光大学校で開催された東亜宗教学術 FORUM 2011年度研究報告会に、金子、白波瀬、中西が参加し、研究報告を行なった。さらに、同年2月には、金光教大阪センターにおいて「支縁のまち」研究交流集会を開催し、日頃から社会活動に従事している宗教NPOなどの諸団体を交えて意見交換を行なった。

(2) 2012年度は、釜ヶ崎（大阪市西成区）や東日本大震災の被災地において活動を展開する宗教者たちからの聞き取りを継続した。具体的には、浪速教会・愛の家の金鐘賢牧師、聖フランシスコ会・ふるさとの家の本田哲郎神父、喜望の家の園田克也氏、同和問題にとりくむ大阪宗教者連絡会議・事務局長

の北浦徳次氏らに対してインタビューを実施した。また、8月には台湾・慈済大学において、中央研究院民族学研究所や慈済大学などの研究者と合同で、日台学術交流研究会を開催し、宮本、村島、稲場、中西、白波瀬、渡辺が研究報告を行なって現地の研究者と意見交換するとともに、「原住民」に対する支援などについても実態を調査した。

(3) 2013年度は、釜ヶ崎（大阪市西成区）などにおいて活動を展開する宗教者たちからの聞き取りをさらに継続し、主に天理教者を中心に、平安な生活から疎外された人々に寄り添い、連帯し、共生しようとして続けられている活動の実態を調査するとともに、彼らのライフストーリーにおける信仰と社会活動の有機的連関を描き出そうと努めた。具体的には、天理教萩野分教会での実態調査を行うとともに、釜ヶ崎で単身での活動の実績がある西川寿一氏（天理教賑町分教会）から聞き取りを実施した。また、平成26年3月には浄土真宗本願寺派栄照寺（大阪市城東区）において研究集会を実施し、「いのち臨床仏教者の会」の大河内大博氏を招いて講演をしてもらおうと同時に、研究者と宗教者双方を交えて意見交換を行い、宗教者があえて「ホーム」を離れて「アウェイ」で活動することの意義と重要性ならびに問題点と課題について、活発な議論がなされた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計15件)

宮本 要太郎、「無縁社会」と宗教者の接点としてのライフストーリー、関西大学文学論集、査読無、63巻4号、2014、73-95

金子 昭、台湾の慈済大学における日台学術交流研究会報告 人文臨床と無縁社会：人間的ケアはいかに可能か、宗教と社会貢献、査読無、3巻1号、2013、53-64
<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/handle/11094/24492>

金子 昭、「無縁社会」への処方箋 「たすけ合い」社会の構築に向けて、伝道参考シリーズ、査読無、XXIV、2013、141-156

白波瀬 達也、岐路に立つあいりん地域におけるセーフティネット 単身高齢男性集住地における再開発と「生存」の課題、生存学、査読無、6号、2013、319-335

稲場 圭信、日本人の利他性と「無自覚の宗教性」、中央公論、査読無、2012年5月号、2012、40-47

白波瀬 達也、沖縄におけるキリスト教系 NPO によるホームレス支援 Faith-Related Organizationの4象限モデルを用いた考察、宗教と社会貢献、査読有、2巻2号、2012、41-58

<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/>

[handle/11094/23002](http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/handle/11094/23002)

稲場 圭信、無自覚の宗教性とソーシャル・キャピタル、宗教と社会貢献、査読有、1巻1号、2011、3-26

<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/handle/11094/18467>

〔学会発表〕(計31件)

宮本 要太郎、「無縁社会」と宗教者の接点としてのライフストーリーについて、日本宗教学会第72回学術大会、2013年9月7日、國學院大学（東京）

金子 昭、釜ヶ崎における天理教の活動 その歴史と現在、日本宗教学会第72回学術大会、2013年9月7日、國學院大学（東京）

白波瀬 達也、釜ヶ崎の地域史における宗教の位置づけ、日本宗教学会第72回学術大会、2013年9月7日、國學院大学（東京）

中西 尋子、釜ヶ崎における韓国系キリスト教会の支援活動、日本宗教学会第72回学術大会、2013年9月7日、國學院大学（東京）

金子 昭、日台の“無縁社会”の状況と宗教者の“支縁”思想及びその実践、東西思想哲学研究会、2013年2月16日、国際基督教大学（東京都）

宮本 要太郎、宗教研究におけるライフストーリーの方法論的意義について、日本宗教学会第71回学術大会、2012年9月8日、皇學館大学（三重県）

宮本 要太郎、無縁社会への宗教者の関わり 総論と問題提起、日台学術交流研究会（基調講演）、2012年8月31日、慈済大学（台湾・花蓮）

稲場 圭信、東日本大震災における宗教者の支援活動、日台学術交流研究会、2012年8月31日、慈済大学（台湾・花蓮）

白波瀬 達也、現代日本における生きづらさと宗教 宗教の新しい社会参加のかたち、日台学術交流研究会、2012年8月31日、慈済大学（台湾・花蓮）

村島 健司、仏教の地域社会化と祭祀圏 九二一大地震後の被災地における慈済会と民間宗教の邂逅、日台学術交流研究会、2012年8月31日、慈済大学（台湾・花蓮）

中西 尋子、無宗教の日本人と韓国系プロテスタント教会、日台学術交流研究会、2012年8月31日、慈済大学（台湾・花蓮）

渡辺 順一、「ホームレス支援」から「支え合いのまち」づくりへ 「宗教」を拠点にした地域「支縁」活動、日台学術交流研究会、2012年8月31日、慈済大学（台湾・花蓮）

金子 昭、「無縁」を“有縁”化する仏教ヒューマニズムの展開 東日本大震災における台湾・仏教慈済基金会の救援活動を通じて、東亜宗教学術 FORUM2011 年度研究報告会、2012年1月7日、圓光大学校（韓国・ソウル）

白波瀬 達也、釜ヶ崎の「生きづらさ」

と宗教、東亜宗教学術 FORUM2011 年度研究報告会、2012 年 1 月 7 日、圓光大学校（韓国・ソウル）

中西 尋子、在日韓国人社会における在日大韓基督教会の役割、東亜宗教学術 FORUM2011 年度研究報告会、2012 年 1 月 7 日、圓光大学校（韓国・ソウル）

宮本 要太郎、「無縁社会」の宗教、日本宗教学会第 70 回学術大会、2011 年 9 月 3 日、関西学院大学（兵庫県）

渡辺 順一、絆喪失時代における宗教運動の課題 「宗教」を人々の「痛み」の側にどう開いていくのか、日本宗教学会第 70 回学術大会公開シンポジウム（招待講演）2011 年 9 月 2 日、関西学院大学（兵庫県）

〔図書〕(計 5 件)

宮本 要太郎、白波瀬 達也、渡辺 順一、大谷 栄一、藤本 頼生、山口 洋典、宮下 良子、中尾 伊早子、櫻井 義秀、板井 正斉、井上 治代、黒崎 浩行、吉水 岳彦、山下 千朝、明石書店、地域社会をつくる宗教（叢書 宗教とソーシャル・キャピタル 第 2 巻）、2012 年、155-178, 179-207, 208-215

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮本 要太郎(MIYAMOTO, Yotaro)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：10312779

(2) 研究分担者

稲場 圭信(INABA, Keishin)

大阪大学・人間科学研究科・准教授

研究者番号：30362750

金子 昭(KANEKO, Akira)

天理大学・おやさと研究所・教授

研究者番号：90214452

(3) 連携研究者

白波瀬 達也(SHIRAHASE, Tatsuya)

大阪市立大学・都市研究プラザ・特別研究員

研究者番号：40612924

村島 健司(MURASHIMA, Kenji)

関西学院大学・社会学研究科・研究科研究員

研究者番号：60707511

(4) 研究協力者

中西 尋子(NAKANISHI, Hiroko)

関西学院大学非常勤講師

渡辺 順一(WATANABE, Junichi)

支縁のまち羽曳野希望館代表理事